



「大正七年水戸衛戍地陸軍諸部隊流行性感冒流行記事」

大正期、いわゆるスペイン風邪は第一次世界大戦の欧州戦場から流行し、日本では内地だけでも数十万人が死亡したといわれています。そうした中、陸軍内でもスペイン風邪（当時は「流行性感冒」と呼称）は蔓延し、陸軍は対処に苦慮していました。

大正7（1918）年、流行は水戸にも広がりました。同年9月から翌月にかけて、戦地から復員した山砲兵第1連隊が水戸を通過した際、歩兵第2連隊派遣の将校以下15名、水戸及び土浦の給養停車場で勤務中の兵士11名が感染しています。この第1回目の流行後、患者は水戸衛戍病院に入院または隔離され、営内の蔓延は食い止められました。しかし、12月2日からはじまった第2回目の流行による感染者は348名を数え、その多くは初年兵でした。

「大正七年水戸衛戍地陸軍諸部隊流行性感冒流行記事」は、水戸衛戍地駐屯部隊（歩兵第2連隊、工兵第14大隊、水戸衛戍病院）における流行性感冒の発生及び蔓延状況、入院の景況、原因及び誘因、症状及び経過、併発及び予後、療法等についてまとめた史料です。この史料には、流行性感冒の罹患者総数は1,970名、その中で入院治療を必要とした者93名（営外将校1、他師管10名を除く）、うち8名死亡と記されています。上掲の史料から、水戸衛戍病院に入院した患者の入隊年別の治療、死亡状況等も確認できます（登録番号：中央-軍事行政衛生-177）。